富山・願海寺城跡

1 所在地　富山市願海寺
2 調査期間　二〇〇二年（平14）八月～九月
3 発掘機関　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
4 調査担当者　古川知明
5 遺跡の種類　城館（平城）跡
6 遺跡の年代　戦国時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

願海寺城は、富山市西部の射水平野に位置し、上杉謙信方の武将寺崎民部左衛門が拠った平城である。城は天文二一年（一五五二）から天正九年（一五八一）まで存続した。城の位置はこれまで不明だったが、今回の調査で城の南端の二重の堀・土橋及び郭の一部、井戸を検出した。内堀は二段に掘られ、郭側の浅い部分に遺物が大量に廃棄されており、木簡、塼、漆塗椀、将棋駒、漏斗、陶磁器が出土した。

（富　山）

8 木簡の釈文・内容

(1)
・「たてわき　」　113×19.5×5　011
・「□〔暫カ〕わりたて□〔己カ〕」

(2)
・「与兵
『大□斗』（重ネテ線刻）」
・「今
『し』（重ネテ線刻）　」　37.5×12×4.5　061

(1)は短冊型の上端を山形にし、下端を切り折りする。表の「たてわき（多て王き）」は、人名の「帯刀」、場所を示す意の「館脇」、織物の立湧紋様の可能性がある。裏の一字目は「暫」の可能性があり、短時間の意味、あるいは塹壕（堀）の意味をもつ。「わりたて（王り多て）」は、攻撃する意の「割り立てる」、館を破壊・破却する意の「割り館」などが考えられる。最後の一字は「己」とみられるが意味は不明。全体として、堀または館に関する軍事的な内容の命令文書の可能性がある。

(2)は将棋駒の歩兵である。表面の「与」は極小で、歩の崩し字とみられる。裏面は「今」の崩し字とみられる。駒には墨書と重なって線刻がみられる。表面には「大部斗」あるいは「大申斗」、裏面

には「し」とあるが、意味は不明である。なお、将棋駒の釈文と解説は、増川宏一氏による。

9 関係文献

富山市教育委員会『富山市内遺跡発掘調査概要V——水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡——』（二〇〇三年）

（古川知明）

(1)赤外線写真（部分）　(1)

小林昌二・戸根与八郎・相沢 央編

『新潟県内出土古代文字資料集成』の刊行

本書は、新潟県内から出土した古代文字資料の集成である。二〇〇三年一一月末までに確認された資料を対象とし、木簡一四一点、漆紙文書四点、墨書土器四〇六六点、文字瓦六〇点、銅印一点の合計四二七二点を掲載する。遺跡一覧表、文字資料一覧（墨書土器等・木簡・漆紙文書・銅印）、図版、文献一覧表から構成されるが、それぞれ個々の遺跡報告書を参照しやすく配慮されている。一九九五年以来九回にわたって開かれてきた「新潟墨書土器検討会」の成果もふまえて編集されたものであり、新潟県内二一二遺跡から出土した古代文字資料の全貌を一冊にして把握できる資料集である。

A4判二〇七頁（うち図版八〇頁）、二〇〇四年二月刊行

定価二〇〇〇円

頒布のお問い合わせ・お申し込みは左記へ。

〒九五〇—二一八一　新潟市五十嵐二の町八〇五〇番地

新潟大学大学院現代社会文化研究科小林昌二研究室気付

新潟墨書土器検討会